

# W. S. Allen の英語音調表記と応用システム論 (Part 1)

都 築 正 喜

## Contents

### Part 1

1. Received Prosody と *Living English Speech*
2. 言語拍リズム論と *Living English Speech*
3. Equal Timing の傾向と英語のリズム形成
4. プロミネンスと音調構造
5. *LES* と *Intonation of Colloquial English*
6. W. S. Allen の音調表記用記号・符号
7. W. S. Allen の音調表記例

### Part 2

8. *Living English Speech* と SSG での記録
  9. *Living English Speech* と SSG による視覚化
- 結論

## 1. Received Prosody と *Living English Speech*

W. Stannard Allen の *Living English Speech* (1954・1960、*LES*) は Subhead に *Stress and Intonation Practice for the Foreign Student* とあるように、外国人学習者を対象に執筆され録音もなされている。特に *LES* は syllable structure、stress shift、rhythm occurrence、prominence allocation あるいは intonation system といった総合プロソディの運用 (Command of English Prosody) に、学習上の困難さを感じる教育環境を想定して書かれている。そのために使用頻度の高い verbal context を示して、音調理論と継続的な実践 (oral practice based on theory) を組み合わせて系統

的に学習させている。このことを、W. S. Allen は、This book is designed for use in English classes for foreign students, its purpose being to present the basic principles of stress and intonation and to provide copious practical exercises. と *Living English Speech* の序文 (What This Book is About) でも明言している。また、*Living English Speech* は、Southern British English Accents (SBEA) を対象に執筆されている。

W. S. Allen (p. 39) は、音調を次のように定義している。

By intonation is meant the “melody” of speech, the changing pitch of the voice. It is to a certain extent controlled by stress, for impotent changes of pitch occur only on stressed syllables.

英語を Mother tongue としない学習者が、英語の音調を文型や意味、更には attitude of speakers との関連において効率的に覚えていくためには、実際に音調型の使用状況を統計的に調査し、理論的かつ体系的に学習する過程が必要である。更に、segment よりも supra-segment が意味の伝達により一層重要であり、到達目標のチェックなどでも意味との関わりを付けやすい、と考えれば、リズムおよびイントネーションの習得は避けては通れないものと言える。別な側面から考察すれば、イントネーション習得のために編集された material を、英国人話者がどのように認識するかも吟味の対象として考えておく必要がある。そこで、筆者は、*Living English Speech* において取り扱われている verbal context の音調について、実際に英語学習にどのように応用できるかについて、イギリス英語の複数の informant による発話感覚と聴覚印象の両面から、直観的な trace を吟味した。その結果、LES は自然な発話体として受け入れられる Received Prosody (RP) として、あるいは音声モデルとしての価値が高く、基礎的な聴取と発話の訓練には非常に取り入れ易いとの結論を得た。本稿では、W. S. Allen の LES で採用されているイントネーション構造が、音調ルールに従ってどのように体系化されているか、あるいは各パーツ (Pre-head、Head、Nucleus および Tail) が verbal context の脈絡の中で相互にいかにより有機的に関連づけられているか、について応用音調システム論から考察する。

## 2. 言語拍リズム論と *Living English Speech*

筆者が W. S. Allen の *Living English Speech* について注目してきたのは、日本語のように syllable-timed rhythm (音節拍リズム) を言語習慣とする学習者が、その counterpart にあると位置づけられる英語の stress-timed rhythm (強勢拍リズム) のように、stress が等しい時間的長さをもって繰り返され、リズムを形成する言語の学習に際して、LES が入門期の音声学習に有益である、と考える点である。

W. S. Allen は *Living English Speech* において、コミュニケーションを前提にした英語音声教育では、個々の segment よりも prosody が発話においても、聴き取りにおいてもかなり重要な要素であることを示唆している。例えば、*LES* (xiv) では、Broadly speaking, a reasonably correct speech-flow is more important for intelligibility than correct sounds. と述べ、更に、特にプロソディの重要性について次のように強調している。

Stress, rhythm and intonation should really be considered as a whole, for they are very closely connected elements of single aspect of the language that we might call Speech Flow. Speech is essentially movement. However accurately we learn to pronounce the isolated sounds of a language we must still train ourselves to set them in motion in the right manner if we wish to make ourselves easily understood. W. S. Allen, *LES* (1960: xiii)

筆者の先行研究で言及したが、前項に関連して、R. Kingdon は、*The Groundwork of English Intonation*, Longman (1965: xiii) において、*Intonation is the soul of a language while the pronunciation of its sounds is its body*, と例えて、以下に引用するように記述している。

A foreigner who speaks a language with correct stressing and intonation but with incorrect sounds (within reasonable limits) will be better understood by natives than one whose sounds are correct but whose stressing and intonation are poor. ——— Intonation is the soul of a language while the pronunciation of its sounds is its body, and the recording of it in writing and printing gives a very imperfect picture of the body and hardly hints at the existence of a soul.

John Wells (UCL) は、*English Intonation* (2006: 2) で、英語のネイティブ・スピーカーが、外国人学習者の発音の誤りの中で、セグメントとイントネーションについては、それぞれどのように見ているか、以下のように述べている。

The problem is this: native speakers of English know that learners have difficulty with vowels and consonants. When interacting with someone who is not a native speaker of English, they make allowance for segmental errors, but they do not make allowance for errors of intonation. This is probably because they do not realize that intonation can be erroneous.

### 3. Equal Timing の傾向と英語のリズム形成

英語では stressed syllable と unstressed syllable によってリズム構成がなされるが、強勢音節から次の強勢音節までの時間をほぼ同じ長さに発音する、という心理的あるいは物理的 tendency によってリズムの基本が作られている。例えば、yesterday は3音節語であるが、際立つ強勢音節は一箇所であり、こうした強勢音節が時間的にほぼ等間隔で現れる tendency、即ち「等時性」(equal timing, isochronism) の原則がリズムを支配する。入門期の音声指導では、発話中の強勢音節の存在を確認することが、聴取と発話において必須である。強勢音節が決まれば、弱音節は曖昧に付随する結果、比較的長い単語の連続でも、英語のリズムルールは自然と繰り返されることになる。ところで、発話において強勢音節の位置を移動する現象(強音節と弱音節の入れ替え)は、強勢音節が重なる結果生じる衝突(stress clash)を避けようとするリズムルールに因るものである。これは、発話時の stress allocation の問題であるが、anticipation の作用が stress shift を可能にしている。

全ての言語にリズムとイントネーションがあることは universal である。Hyun Bok Lee (Seoul National University) に拠れば(講演において)、例えば、韓国語は音節拍リズムと強勢拍リズムの中間であるとされる。そして、どちらかと言えば、強勢拍リズムに近い、と H. B. Lee は述べていた。韓国語にも、モーラの認識を持ち込むことは無理であるが、日本語と韓国語を音節形成、強・弱音節構造、強弱・高低音節、リズム・拍などの prosody 面から比較すると、やはり韓国語の方が英語に近い響きを持つと、H. B. Lee は指摘する。筆者の印象では、イギリス英語とアメリカ英語では、それぞれの響きによって吟味が必要ではないかと判断する。

前節で述べたように英語では、stressed syllable が、時間的にほぼ等しい間隔で現れる tendency がある。ここで、tendency という表現を用いたのは、isochronism の傾向がある、という意味であり、絶対的な強勢音節の occurrence があると、述べているものではない。話し手側では、articulatory mechanism としての isochronism を anticipation として予測し、聞き手側は、auditory impression としての isochronism (の傾向)を判断する。話し手は、調音に際し「最小労力、最大効果」を原則とする。この時 Spoken English では、発話効率と聴取の正確さのバランスも重要となる。その理由は、発話の経済(economy of effort)を追求すると意味の理解が不正確になりやすいからである。総括として、英語の isochronism 論は研究の進捗につれて、慣用面からの語句の用法、発音と綴り字、発話と聴取、心理面と物理面などからも広く認識されるようになってきている。英語の韻律特徴を3点挙げるとすれば、①この equal timing、isochronisms (の傾向)という等時性に関わる要素と、また、②強勢と強勢までの間隔を foot とし、それを繰り返す(傾向がある)という speech rhythm rule と、更に、③ Pre-head、Head、

Nucleus および Tail がシステムとしてイントネーション構造を成し、補完機能を有すること、などである。(都築：2000、2005、2012)

#### 4. プロミネンスと音調構造

音調構造を分割する際に、音調核 (Nucleus) は必須である。音調核が成立するためには 5 つの要件が揃わなければならない。第 1 に、重要語の中で発話の最後の位置に現れる新情報であること。第 2 に、強音節に置かれること。第 3 に、最大のピッチ変動と強勢を持つこと。第 4 に、意味上の focus であること。第 5 に、concentration があること、などである。音調核のみが単独に頻繁に現れることもあるが、音調核の後に尾部があればそれに影響を及ぼす。low-tail になるか、rising tail になるかを決定するのは音調核である。頭部があればシステム上の性格を決定する。下降＋上昇音調核には falling-head が先行し、下降音調核には rising-head が先行する原則がある。この時、stepping-head (emphatic high head) や sliding-head (emphatic falling head)、更には、climbing-head (emphatic rising head) などの強調頭部が pitch range に現れることがある。結局、音調核は常に話者の最も伝えたい新情報を担い、話者の態度や感情が音調核に最も顕著に現れる。話し手と聴き手との間では、音調核を中心として、specified idea と general idea、新情報と旧情報、marked と unmarked などが、補完機能の働き等により自動的に決定され発話の脈絡に組み込まれる。ここで言う、last accented word とは、プロミネンスのある音節を含むことになる。従って、音調核とプロミネンスを音調システム上は同じ役割を担うものとして扱うこともできる。即ち、広く認識されているように、プロミネンスが置かれている音節を最大に際立たせるためには、プロミネンスが想定されている箇所、例えば、音調核より前に現れる前頭部や頭部の様態をまず判断し、音調核の種類を予測しながら音声コミュニケーションに移行する。

以下に、プロミネンスについての David Crystal と A. C. Gimson の記述を引用する。

A term used in Auditory Phonetics to refer to the degree to which a sound or syllable stands out from others in its environment. Variations in length, pitch, stress and inherent sonority are all factors which contribute to the relative prominence of a unit.

(David Crystal: 1987, p. 248)

Our sensation of the relative *loudness* of sounds may depend on several factors. A sound or syllable may appear to stand out from its neighbours—be ‘louder’—because a marked pitch

change is associated with it or because it is longer than its neighbours. It is better to use a term such as *prominence* to cover these general listener-impressions of variation in the perceptibility of sounds. (A. C. Gimson, 1981, p. 27)

## 5. LES と *Intonation of Colloquial English*

本稿で取り上げる W. S. Allen の *Living English Speech* は、おそらく J. D. O'Connor & G. F. Arnold が1976年に著した *Intonation of Colloquial English (ICE)*, Longman (1980, Sixth impression) にも影響を与えたと思われる。但し、J. D. O'Connor & G. F. Arnold は、*ICE* の Preface の中で、R. Kingdon については、... whose system of tone-marks we have in some large measure adopted. と言及しているが、Longmans (London) から出版された W. S. Allen の *LES* には触れていない。J. D. O'Connor & G. F. Arnold が影響を受けたと記述した、R. Kingdon の *The Groundwork of English Intonation*, Longman, 1966 を吟味した結果、*ICE* の7種の基本音調核設定のルールと特徴、および音調群、音調群連続の確立などにおいて影響を見ることができる。G. F. Arnold 先生 (Reader in Phonetics, University College London) は、M. Schubiger の *English Intonation*, Max Niemeyer, 1958 からも影響を受けたと、ロンドン大学音声学部の tutorial で述べていた。但し、*ICE* には、References の記載がないため、Intonation に関する先行研究からの影響は、なぜ References を記載しなかったのかも含め不明である。

確かに、J. D. O'Connor & G. F. Arnold が verbal context の音調イメージを音調符号で表記したことは、言語形成期を過ぎてからの英語の発話や聴き取りの学習では多くの点で効果的である。特に、Intonation と Stress を、例えば、・ ・ ・ — — — ↗ ↘ ↗ ↘ ↗ ↘ のような pitch level 型で表記し、また trace する一方で、同時に speaker's attitude を overlap させている為、英語音声教育の現場には応用し易い利点がある。ロンドン学派の中にあっては、数年前に、John Wells: *English Intonation* (2006) が著わされたが、英語教育音調論の実践テキストとしては、*Intonation of Colloquial English* が今なお突出した感がある。筆者が既に引用したように、A. C. Gimson (1994: 314) に拠れば、J. D. O'Connor & G. F. Arnold の *ICE* は、以下のように評されている。

The intonation of English has been studied in greater detail and for longer than that of any other language. No definitive analysis, classifying the features of RP intonation, has yet appeared (though that presented by O'Connor and Arnold (1973) provides the most comprehensive and useful account from the foreign learner's point of view).

しかし、改めて立場を変えてみれば、W. S. Allen の *Living English Speech* にも同等の価値を

与えてもよいように思われる。筆者は *LES* が 1960 年代に日本語に翻訳されるべきであったとも思っている。D. Jones の名著、*An Outline of English Phonetics* (初版は 1918 年) も翻訳されていなかったの、筆者は大西雅雄博士には日本語への翻訳を進言し、Hyun Bok Lee 博士にも韓国語への翻訳をお尋ねしたことがあったが実現はしなかった。いずれにしても、1950 年から 80 年にかけてのほぼ 30 年間に、H. Sweet、H. E. Palmer、D. Jones、A. C. Gimson、W. S. Allen、J. D. O'Connor & G. F. Arnold、H. B. Lee、J. C. Wells らの研究成果を経て、あるいは先行研究を踏まえ、伝統的ロンドン学派の音声理論を教育現場に応用し活かそうとする現在の実践的英語イントネーション研究の基礎が確立されたと言える。

## 6. W. S. Allen の音調表記用記号・符号

情報伝達のための message は音調構造上、導入部 (introductory section)、前頭部 (pre-head, minor section)、頭部 (head, major section)、基幹部 (body, main section)、音調核 (nucleus)、尾部 (tail, minor section) や移行部 (transition section) などに分割され、予測行為 (anticipation)、補完機能 (complement) や歩み寄り (compromise) のような様々な役割を担ってイントネーション構造の様態を成し、音声コミュニケーションに必須の要素となっている。こうした音調構造の各パーツを相互に有機的に関連づけ、音調ルールに従って順序立てて合理的に体系化したものが「音調システム論」である (都築：2012)。音調システムを支配するルールを表記し判読することは難解であるが、W. S. Allen は *Living English Speech* に於いていくつかの工夫をしている。それらの主なものを *LES* より引用する。(|| の使用は筆者。)

強勢のある音節・単語 ⇒ ' 音節初頭に表記

E.g. ' take it a'way

導入的開始弱音節 ⇒ italic type で表記

E.g. *We can`walk* there |if there's,time. || (p. 62)

上昇・下降音調の開始音節 ⇒ bold type で表記

E.g. *On the'* top of the ,hill|stood an' old ` church. || (p. 61)

下降表記 ⇒ `







(B) E.g. “What’s the <sup>1</sup> good of wearing <sup>↑</sup> <sup>1</sup> transparent <sup>1</sup> stockings

◦     ◯     ◯     ◯     ◯     ↑     ◯     ◯     ◯     ◯

if your <sup>↑</sup> legs are `blue?” my mother asked.

◯     ↑     ◯     ◯     ◯     ◯     ◯     ◯     ◯     ◯

W. S. Allen の *LES* と J. D. O’Connor & G. F. Arnold の *ICE* に共通して言えることの一つは、以下に挙げる音調核、音調群連続が意味・内容や発話者の態度に照合して重要である、としている点である。特に、W. S. Allen は、下降+上昇連続音調核を *LES* において詳細に記述している。

I 類：音調核基本型

- (1) ◯、◯、◯ + ◯ 及び ◯

II 類：◯ 類似音調群 type

- (1) ◯ + ◯ 下降+上昇音調群連続 type  
 (2) ◯ + ◯ 下降音調群+休止+上昇音調群連続 type  
 (3) (Rising Head) [ ʌ ] + ◯ + ◯  
 上昇頭部+下降音調群+上昇音調群連続 type

但し、W. S. Allen の *LES* とは異なり、J. D. O’Connor & G. F. Arnold, *ICE* の 7 種の基本音調核設定のルールと特徴をまとめると以下のようになる。なお、イントネーション構造において、システムを成す音調核の基本型は、意味・様態と使用頻度の点からみて、下降調、上昇調、下降・上昇調の 3 種に絞られる。

I 類：*ICE* に採用された音調核

- ① 下降音調核として 2 種類 (high fall と low fall)  
 ② 上昇音調核として 2 種類 (low rise と high rise)  
 ③ 下降+上昇音調核、high ⇒ low ⇒ mid  
 ④ 上昇+下降音調核、mid ⇒ high ⇒ low  
 ⑤ 平板音調核、中平板音調核 mid

II類：ICE から除外された音調核

- ①下降音調核の中で、high から mid まで下降する音調核
- ②上昇音調核の中で、low から high まで上昇する音調核
- ③下降＋上昇音調核の中で、mid ⇒ low ⇒ mid へと移動する音調核
- ④下降＋上昇音調核の中で、high ⇒ mid ⇒ high へと移動する音調核
- ⑤上昇＋下降音調核の中で、low ⇒ mid ⇒ low へと移動する音調核
- ⑥上昇＋下降音調核の中で、mid ⇒ high ⇒ mid へと移動する音調核
- ⑦平板音調核の中で、高平板音調核 high mid と low mid 音調核

## 7. W. S. Allen の音調表記例

既に筆者の先行研究において、あるいは本稿の前項において言及したが、通常、音調システムの中でプロミネンスの置かれている音節に生じる nucleus は、最大のピッチ変動を有し、最も強い強勢が置かれ、prominence としての扱いを受け、新情報を担い、意味上の focus である。音調核はその文の中で、いくつかある accented word の中で、「最後の重要な単語」(last important word・last accented word) の「強音節」(stressed syllable) に現れるのが原則である。一般論として、話者の attitude や emotion が音調核に最も顕著に現れる。広く認識されていることではあるが、聴き手が発話のどの部分が新情報の focus・marked で、どの箇所が旧情報の unmarked であるかを瞬時に判断できるのは、言語形成期に習得された、話し手と聴き手との間に了解されている、specified idea と general idea に関する「約束事項」があるからである。この時、話し手と聴き手のコミュニケーションにおいて、anticipation の作用が働いている（都築：2000、2002a）。

ここで、“The Switchback tone group” と “The Long Jump tone group” (J. D. O’Connor & G. F. Arnold, ICE) を具体例として、anticipation について、日本英語音声学会編『英語音声学辞典』（2005: 278）より引用する。

発話の Head が Falling Head で始まれば、「高下降＋低上昇」の核音調が起こりうる。anticipation の作用により予測できる。即ち、聴き手は、Falling Head が認識できた瞬間に次に来るであろう核音調を予測する。全体の様態として “The Switchback tone group” をイメージする。更に、発話が Rising Head で始まれば、「高下降」の核音調が現れる事を示唆している。これも Anticipation の作用である。即ち、聴き手は、Rising Head が認識できた瞬間に、次に高下降の核音調が現れることを察知し、音調全体の様態として “The Long Jump tone group” をイメージする。

前節で言及した W. S. Allen 方式の表記方法をイントネーションの構造や様態に照らして具体的に考察を進めるために、以下に *LES* の会話文 *MUM'S THE WORD* (pp. 162–164) を引用する。

### MUM'S THE WORD

“*I've* 'come up to 'talk to you,” my mother said, |  
 “*while you're getting* ,ready. 'Who's 'going to 'be at the  
 'party?”  
 “*I* 'don't 'know,” I said.  
 “'Will you en,joy it?” my mother asked.  
 “*I* 'HOPE ,so,” I said.  
 “*You've* 'only got 'fifteen 'MIN,utes,” my mother said.  
 “*Yes, I* 'know.”  
 “'Can I ,help you?” my mother asked.  
 “'No, | 'thanks 'awfully,” I said.  
 “'Will ,Betty be there?”  
 “'No,” I said.  
 “'Why 'not?”  
 “*Because the* 'people 'giving the 'party don't ↑ 'know  
 her.”  
 “'THAT'S ,funny,” my mother said. “*I* 'wonder 'why  
 they don't. 'Isn't that 'funny, *their* 'not | ,knowing her?”  
 “'Why?”  
 “'Well, | *because it* 'IS,” my mother said. “'Why  
 don't you intro'duce her to them? *They'd* 'like her. *I've*  
 'ALways liked Betty. *I was* 'telling your 'father the ↑  
 'other 'day *that I've* ,always liked | ,Betty. 'What are you  
 'rubbing 'on?”  
 “*Foun'dation* cream,” I said.  
 “*I'm glad* 'I don't have to do all ,that,” my mother said.  
 “'YOU use 'POWder.”  
 “*I don't* 'BOTHER with all that 'OTHER old ,rubbish,”  
 my mother said. “*My* 'POWder only blows ,off, | 'anyway.  
*I* 'LIKE that ,dress. *It* 'suits you. It 'doesn't 'make you  
 look ↑ 'old and 'haggard | like 'SOME of the things you  
 ,wear. 'That 'BRACElet you gave me for 'CHRISTmas  
 goes ,well with it 'TOO, | 'doesn't it?”  
 “'Yes,” I said.  
 “'What on 'earth are you 'doing to your 'hair?” my  
 mother asked.  
 “'Putting it 'on 'top.”  
 “*Oh, I* 'DON'T like 'THAT,” my mother said.  
 “'WHY are you doing it like that?”  
 “*I* 'like it.”  
 “*Your* 'FATHER won't ,like it,” my mother said.  
 “'Good 'heavens, | *your stockings are trans* PARENT.”  
 “'Yes.”  
 “'What's the 'good of 'wearing ↑ 'transparent 'stockings  
 if your ↑ 'legs are 'blue?” my mother asked. “'Are you  
 'going to 'wear your ,boots | *and* 'take your 'shoes with  
 you in a ,bag?”

“`No,” I said.  
 “`You’ve only got `FIVE minutes `NOW,” my mother said.  
 “`Yes, | I `know.”  
 “`I’ll `Sammy be there?” my mother asked.  
 “`I `THINK ,so.”  
 “`Oh `good,” my mother said. “I `hope you’ll be `nice and po`LITE to ,him. You `will, | `won’t you?”  
 “`Yes.”  
 “`Yes, `try,” my mother said. “`I’d you `like him to `come to ,tea?”  
 “`No.”  
 “`Oh, `ALL ,right,” my mother said. “`But I `think you’re `very `silly, | `THAT’S ,all. I remember I `didn’t `really `like your `FATHER very much when I `FIRST ,met him, | but you `WON’T take any notice of `ANything I can ,say. `Can you ,walk in those shoes?”  
 “`Yes.”  
 “`You’re going to be `late, | `aren’t you?” my mother said.  
 “`Yes.”  
 “`Oh!” my mother cried. “`You’re `not `wearing your `vest! `HERE’S your ,vest! `Why have you `taken it `off? `WHY aren’t you wearing your vest?”  
 “`Because I’m `not `going to,” I said.  
 “`I’ll wear a `cardigan then,” my mother said.  
 “`You’ll be `SOR,ry,” my mother said, | “`when the `OTHERs are all en`JOYing them,selves | and `YOU’RE huddled over the `FIRE | with your `TEETH ,chattering | and a `RED `NOSE | and `MAUVE `HANDS. Sammy `WON’T find `THAT at,tractive.”  
 “`I’m `READY ,now,” I said. “`Good-,bye.”  
 “`I’ll `put your `hot-,water bottle in,” my mother said.  
 “`En`JOY your,self, `Good,bye.”

「W. S. Allen の英語音調表記と応用システム論」の第II部では、LES の会話文 MUM’S THE WORD (pp. 162-164) の全文を sound spectrogram (SSG) による視覚化を通して考察する。なお、イントネーションを表記するためには専用の符号が必要になるが、筆者の英語音調に関する先行研究の表記方法を継続して、本稿でも、イントネーション符号を2種に分けて使用した。それらは、高低関係を表す符号と文字に直接付ける符号とである。前者を、「高低符号」と呼び、後者を「文字符号」と呼んで区別する。主たる音調表記用符号は、都築が作成した「Tsunami-Arm-1998/2005」を用いた。本稿をはじめ筆者の先行研究の執筆に当たって、Hyun Bok Lee、John Wells、John Ingram、Jill House、Michael Ashby、Ho-Young Lee らの助言を頂いた。ここに感謝申し上げたい。

## 主要参考文献

- Allen, W. S. (1954, 1960), *Living English Speech*, Longmans.
- Armstrong, L. S. and Ward, I. C. (1931). *A Hand Book of English Intonation*, W. Heffer& Sons, 2nd ed.
- Coleman, H. O. (1957). *Intonation and Emphasis*, translated by Iwasaki T., Kenkyusha.
- Gimson, A. C. (1981). *An Introduction to the Pronunciation of English*, Edward Arnold, 3rd ed.
- Gimson, A. C. (1977). *A Practical Course of English Pronunciation*, Arnold.
- Jones, D. (1960). *An Outline of English Phonetics*, 9th ed., Cambridge Univ.
- O'Connor, J. D. (1980). *Better English Pronunciation*, Cambridge.
- O'Connor, J. D. & Arnold, G. F. (1976, 1980). *Intonation of Colloquial English*, Sixth impression, Longman.
- Tsuzuki, Masaki (1990). *A Statistical Study of Intonation in Southern British English for Non-native Speakers*, Shin-ikusun 教授定年退官記念論文集 (ソウル大学出版部刊行), Seoul National Univ., Korea.
- 都築正喜 (1997). 日本人英語学習者が困難とする RP 音調群の連続、日本英語音声学会刊行、「英語音声学」創刊号.
- (2000). 英語プロソディの Anticipation について、日本英語音声学会刊行、「英語音声学」第 3 号.
- Tsuzuki, Masaki (2001). *A Statistical Study of Colloquial English Intonation For Japanese*, 日本英語音声学会刊行、「英語音声学」第 4 号.
- 都築正喜 (2002a). 英語イントネーション構造とアンティシペーションの作用、日本英語音声学会刊行、「英語音声学」第 5 号.
- (2002b). 「Speech Analyzer で考察したイントネーションの Anticipation」、『栞矢好弘教授退職記念論文集』(甲南大学)、日本英語音声学会叢書「英語音声学シリーズ」第一巻、西原哲雄・南條健助共編.
- (2005). 「引用符に連続する Rising Tail の分析研究」、八木克正博士(関西学院大学教授)還暦祝い論文集『英語語法文法研究の新展開』、田中実・神崎高明共編、栄宝社.
- (2012). 「英語音調システムの Tail と Pre-head の Compromise」、『21世紀英語研究の諸相』(八木克正教授退職記念論文集)、神崎高明:井上亜衣編集、開拓社.
- Wells, J. C. and Colson, G. (1771). *Practical Phonetics*, Pitman.
- Wells, J. C. (2007). *English Intonation: An Introduction*, Reprinted, Cambridge University Press.
- Wells, J. C. (2008). *Longman Pronunciation Dictionary*, Third edition, Longman.
- 日本英語音声学会編:編集主幹、市崎一章 (2004). 『英語音声学活用辞典』、日本英語音声学会出版部.
- 日本英語音声学会編:編集主幹、市崎一章 (2005). 日本英語音声学会創立10周年記念『英語音声学辞典』、成美堂.